

区内唯一の助産院

大森助産院(中央7丁目)
助産師 加藤美登利 先生

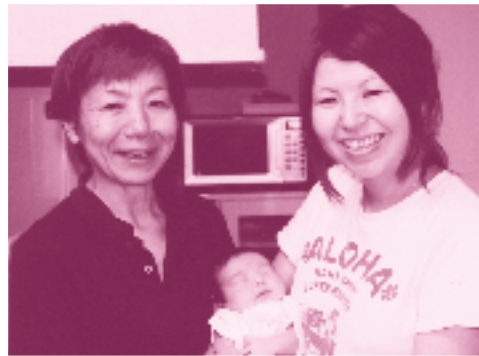
いま、妊婦の99%が病院で出産しています。入院期間は正常分娩の場合、初産で5日、2人目からは4日。短くなったとはいえ、アメリカの36時間、オランダの翌日退院には及びません。しかし日本も昭和30年あたりまでは自宅出産が主流。つまりは即日帰宅。助産師さんの力を借りて、家族が見守る中で赤ちゃんを生まれました。

今日ではそんな出産はわずか1%、東京都なら千人。自宅や助産院での出産は、むしろ選り抜かれた、自分らしいお産を望む人たちのこだわり出産と言えるかもしれません。

助産師の仕事は お母さんに寄り添うこと

加藤さんは25年間総合病院に勤務し、千人以上の赤ちゃんをとりあげてきました。そして最後に勤めた大田区内の病院の産婦人科閉鎖を機に独立。空き家になっていた実家に2009年

4月、助産師として夢の実現に向けて助産院の看板を掲げました。



大森助産院(中央7丁目) 助産師
加藤 美登利 先生

そんな加藤さんの夢とは？

妊産婦の多様な想いに応えられる、人と地域に根差した医療への貢献です。「妊産婦の一番のニーズは、妊娠から産後まで見てくれる、自分をよく知ってくれている人が傍らにいます」と。助産師の仕事は、お母さんに寄り添うことと明確です。

そんな大森助産院は、相談から始まって産前の定期健診、自宅または提携病院(24時間以内退院)での出産、産後はヨガや食事指導と体作りまでのカウンセリングを行っています。収入を伺ったら、それは厳しいとの

こと。もともとのニーズが1%、そのうえ35歳以上で初産の人は正常分娩でない場合も多いために助産院の利用ができません。ところが産み方にこだわりを持つ人ほど出産適齢期をキャリア形成に使いがちなので、助産院にとっては年齢のハードルも高いのです。

自宅出産にはどんな利点がある？

「まず、夫が強くなります。母親を支える一番の者が自分だと体で知るからです。出産のときは男の人は本当に強い力を出してくれます。その後に続く喜びも悲しみもある子育てへの、父親としての覚悟や、子どもとの絆が生まれる瞬間でもありますね」と目を輝かせます。共に子連れ再婚の二人が、新たな子を相談のうえ自宅で産み、出産の過程で、家族が見事に一つになっていった例を語ってくれました。

女性が産むのだから 医療も女性が支えたい

助産院は、今後もマイナーな存在であり続けるのでしょうか。加藤さんの答えは「否」です。大森助産院の訪問者はほとんどが夫婦。それも女性側が

決断して夫を連れてくるのか。女性が主体的に産み、自分の人生を左右する出産。助産院は、多様な出産ニーズに応える先験的な取り組みとし、存在すると断言されます。病院としっかり提携して異常分娩にも備え、一方、病院側も助産院の存在を尊重する姿勢です。

助産師の資格は、日本では今もって女性のみに与えられています。また助産師は法律に基づき、「女性のためだけではなく、家族や地域社会の中にあっても健康相談や教育に重要な役割を担っていく」ことが期待されています。しかし現行では、助産業務と保健指導業務は分断されがち。主治医のように同じ助産師さんが妊娠から産後までついてくれたら、心強いことは請合いです。

ご自身の子育ては、週3日勤務と夫の協力で乗り切ったそう。企業戦士世代ながら、「夫はジョン・レノンに憧れていたのね。トンチンカンな育児をやっていましたか、それを言ったら、ね」と微笑される加藤さんでした。

